保存

福井の肖像画

1
2

福井の肖像画

福井市立郷土歴史博物館

はじめに

肖像画は、わが国の造型活動のなかで、重要な位置をしめてきました。古代には専ら聖賢、祖師の像など鑑戒や崇拝の目的で描かれましたが、やがて、像主を記念し永遠にその姿を遺すために制作されるようになります。

そのため、像主の相似だけでなく、個性や思想的背景をも表現して描かれました。

日本にはまず、中国から禅僧像（頂相）が輸入され、その影響をうけて中世以降の武家社会にまで及びました。

今回の展観では、肖像性の極めて高いものから現代の創作画像に至るまで、福井ゆかりの歴史人物の肖像画を、史学・美学・哲学の立体的な視点でとらえ、紹介してみました。作品を通じて各人物の理解に資するところがあれば幸甚です。

平成五年十月一日

福井市立郷土歴史博物館

凡例

一、本書は、平成五年十月一日〜十一月三日迄を会期として開催した、開館四十周年記念特別展「福井の肖像画」の解説図録である。

一、収録画像は、すべて像主の生存年代順とした。

一、前半部に画像すべての写真を収め、後半部には全画像の解説を載せている。

一、解説は、画像名・数量・制作時期・寸法・所蔵者名・解説の順に記述した。寸法は、センチメートル（糎）、縦×横で示した。

一、所蔵者名は、本館の収蔵品については、「福井市春嶽公記念文庫」の外、「〇〇市〇〇氏寄贈」「〇〇市〇〇氏寄託」として、寄贈品・寄託品の別を示した。また、今回の展示に限って諸家より借用した画像については、「〇〇市　〇〇蔵」等と表記してある。

一、収録画像に付した番号は、図版・解説に共通している。

③ 重要文化財　朝倉孝景(英林)像

② 新田義貞像

⑤ 朝倉義景像

④ 重要文化財　朝倉義景像

⑧ 柴田勝家像

⑫ 浅井長政夫人織田氏（お市の方）像

⑭ 長谷川秀一像

⑮ 高野瀬秀隆像

⑯ 前田利家像（開禅寺本）

⑰ 前田利家像（蓮江寺本）

⑲ 結城秀康像（性海寺本）

⑱ 結城秀康像（運正寺本）

㉕ 松平吉品像（瑞源寺本）

⑳ 松平忠直像

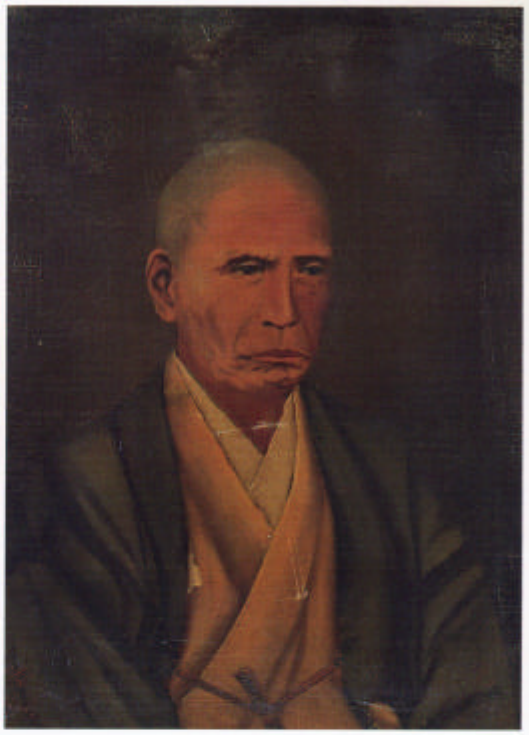
㊲ 松平春嶽夫人細川氏（勇姫）像

㊱ 小野玄信像

㊳ 鈴木主税像

㊴ 閑部詮勝像

㊵ 橘曙覧像（井手家本）



㊴ 半井仲庵像

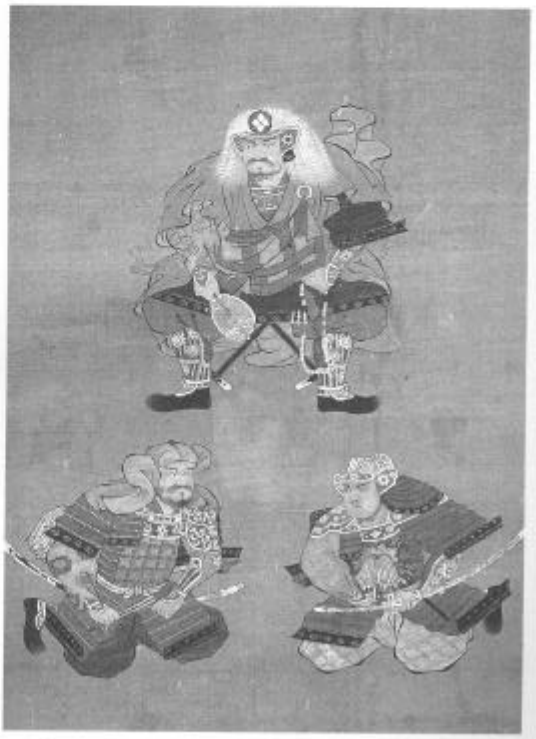
㊸ 坂本龍馬像

㊷ 高杉晋作像

⑥ 武田信玄軍陣影

① 継体天皇石像原画

⑨ 柴田勝家像



⑦ 武田三将図

⑪ 柴田勝家像（宗法寺住職家本）

⑩ 柴田勝家像

㉑ 松平光通像

⑰ 堀秀政像

㉒ 笹治（山県）正時像

㉓ 長光院像

㉕ 金屋吉広像

㉔ 笹治（山県）正香像

㉖ 金屋吉矩像

㉗ 金屋吉治像

㉛ 松平春嶽像

㉙ 竹酔園乎哉像

㉟ 松平春嶽像

㊱ 松平茂昭像

㊲ 中根雪江像

㊳ 松平主馬像

⑫ 佐々木長淳像

⑪ 播曙覧像（菱川師福像）

⑭橋本左内像

⑬ 橋本左内木版像

⑯ 橋本左内像

⑮ 橋本左内像

⑱ 米倉忠七像

⑰ 横井小楠銅版像

紙本著色柴田勝家像について

足立尚計

柴田勝家（？～一五八三）は、織田信長の重臣であり、越前北庄城主として北陸の経営にあたった。信長歿後の天正十一年（一五八三）、豊臣秀吉によって攻められ夫人、おいち（小谷の方）と共に自害したことで知られる。しかし、当然としてその史料には乏しく、肖像もまたその肖像性において得られるものはなかったが、昭和三十八年四月、故青園謙三郎氏によって、個人蔵の勝家像が発見された。青園氏は「私は昭和三十八年四月、ふとしたことから東京で、柴田家の子孫と名乗る人から門外不出の〝勝家の肖像画〟を見せてもらった。立派な顔である。先祖は北ノ庄城落城後、九州の柳川に逃れたという。鑑定をしてもらったらと勧めたが、〝先祖からの遺言で、外には出さない〟ということだった。私の知るかぎり、これが柴田家の唯一の顔だ。」（「歴史と旅」昭和五十六年六月）と、同像について紹介されているが、〝門外不出〟の肖像画は、以後いわば〝幻の肖像〟として、秘かに研究者や歴史愛好家の間でその存在のみが知られるに留まり、公開されたり熟覧される機会には恵まれなかった。ところが、今般現当主、柴田勝次郎氏（千葉市）の深いご理解によって、本展に出品され、また、当館寄託品として以後保管・研究そして公開されることになったのである（柴田家の伝承によれば、北庄籠城中に勝家が近侍の僧侶に命じて描かせ、遺児勝春に託したものという）。

さて、本像は、紙本著色で、額装。本紙の寸法は、縦五八・七×横二六・八糎である。

像主の寸法は、縦一八・五×横一七・〇糎と小さい。像の右上に「柴田勝家之像」と墨書されているが、この墨書は、同家の「歴代表」の筆者と同筆とみられ、明治初年のものであろう。本像は、円座に坐し、軍陣影で、右手に扇子を、左手に太刀を握っている。裸足で髪は乱れ、腹部は剝落しているが、顔面に剝落はなく、眼光厳しい表情には、鬼気せまるものを感じる。腕は太く筋肉質で毛深い。また、手足の指の描き方も力強くリアルでしかも丁寧な筆致である。像主の左下部に朱印（方形）があり、「□□淵達」と見えるが鮮明ではなく、なお考究が必要であろう。本像はもとは軸装であったが、剝落を防止するため先当主、甲四郎氏が、額装に改められた。本像の附属文書には、「慶長五庚子年十月廿日春、□（虫害）勝院殿慶春日威大居士　阮定　□（虫害）臣五人戦ニテ於八院矣　家重　忠信院日□（虫害）居士　慶長五庚子年　家平　家業□（虫害）日□（虫害）居士　十月廿日　日□（虫害）行居士　同曾院日重居士　従柴田勝春　院日樂居□（士カ）　戦士於八院」と記されている。

ここに見える柴田勝春こそ、勝家の遺児として「歴代表」に登場する善右衛門勝春である。同書には、

柴田修理進勝家―柴田善右衛門勝春中務亟云云
天正十一未年四月北之庄籠城之刻乳母之有懐家臣塩冨頼母二被介抱而北之庄出立之砌。白籏壱流重代守本尊観世音所持江（マヽ）近（マヽ）国石山勝（柴田）久盛政（佐久間）等之安否相窺之処各於京都六條河原為羽柴秀吉公被誅依之塩冨以下二被介抱而始而九州赴筑前国糟屋郡青柳村二居住仕（以下略・註は筆者）

と、みえる。「歴代表」によれば、その後、勝春は、のちの、柳川

藩主、立花氏に召出され、立花家の重臣、小野和泉守鎮幸に従い、文禄・慶長の役で戦う。慶長五年十月十九日鍋島直茂と立花宗茂との合戦（江上合戦）で、筑後国（福岡県）江上八ノ院において、負傷した小野鎮幸を帰陣させて、防戦する。その結果、勝春と、北庄以来の家臣である塩冨頼母ら五名は残らず戦死したという。

その後、勝春の子市兵衛勝輝は、筑前柳川にあって難を逃れ、その子市兵衛勝信は島原の乱に出征、以後も歴代立花家に仕え、維新時には、元之助勝之が戊辰戦争に従軍したが、家伝によると故あってその後帰農したという（略系図参看）。

さて、初代善右衛門勝春の存在を他史料で裏付けねばならない。『福岡県史』近世史料編「柳川藩初期」所収の「小野和泉守合戦注文写」（小野家文書）に、

慶長五年十月廿日、於江上表合戦之刻、小野和泉守与力・被官・中間、或被疵、或戦死之衆着到、銘々加披見了

とあり、同書中の「戦死之衆」二十五名の中に「柴田善右衛門尉（鎮幸）并被官一人」とその名が見える。また「柳川領軍役定」の「小野和泉与力居城蒲池」に善右衛門の名が五十二人の中に確認できる（米多比家文書）。このことから「歴代表」の記述はその史料性において信用に足るものと思われる。

「歴代表」には、さらに善右衛門勝春が、戦死した事情についてこう記している。

慶長五年十月十九日於八ノ院御一戦之刻出陣之儀奉願之処御意尚勝春譜代之非臣不可及出陣ニ之旨被仰付処再三依奉願之小野鎮幸公之組ニ罷出候、翌日（二十日）諸将強戦此時諸将兵士等大半戦死鎮幸公蒙鉄砲疵依之雖欲帰陣勝春以下防戦此間ニ小野氏帰陣勝春尚不去戦場入敵陣終戦死人数左之通

として、勝春以下の戦死者六名を挙げている。

「歴代表」を披見する限りにおいて勝家の遺児勝家は、長じても薄幸な生涯をおくり戦乱で悲惨な最期をとげた。

「歴代表」と家伝口碑が史実に近いものであるとすれば、本像は、勝家没後実に四一〇年ぶりの北庄（福井）帰郷であり、また青園氏の発見後三十年を迎えることになる。

肖像画は、「生前あるいは死後早い時期に作成されたと判断されるものでなければならない。」（村井康彦氏「女性肖像画とその時代」（『大和文華』第五十六号）とすれば、本像は、勝家の寿像（像主の生前に描かれた画像）とみることができようか。更なる研究を誓って、擱筆する。

柳川柴田家略系図（柴田勝次郎氏蔵「歴代表」等による。）

- 勝家 ― 勝春 ― 勝輝 ― 勝信 ― 勝重
  - ①善右衛門 筑前柳川柴田氏初代、小野鎮幸家臣
  - ②市兵衛 柳河立花家客分
  - ③市兵衛
  - ④市兵衛
- 勝宗 ― 勝次 ― 勝光 ― 勝直 ― 勝義
  - ⑤市兵衛
  - ⑥市兵衛
  - ⑦市兵衛 後改中村理左衛門
  - ⑧市兵衛
  - ⑨善右衛門
- 勝之 ― 善右衛門 ― 甲四郎 ― 勝次郎（現当主）
  - ⑩元之助 帰農
  - ⑪
  - ⑫中央大学総長 中央大学教授
  - ⑬千葉市在住

（福井市立郷土歴史博物館学芸員）

解説

①継体天皇石像原画　一幅

明治時代

紙本墨画　四八五・〇×一四八・〇糎

本館蔵

本図は明治十七年（一八八四）福井の石工、内山甚四郎らが同業の士と図り、私費を募って福井の足羽山三段広場に建立した継体天皇石像の原画である。

石像は、足羽山公園開設の際、富岡仲次郎の寄付により修理されたが、昭和二十三年の福井大地震で倒壊した。現在の石像は、その後昭和二十七年に修理・再建されたものである。原画には、当時の足羽神社社司馬来田善広が箱裏書きを付している。

それによると、明治十六年（一八八三）石匠らが発起人となり、福井中学の教師らが故実を温めて天皇の尊影ん描いたというが、いかなる文献により考証したかは明らかではない。明治天皇に以ていることが一つのヒントになるかも知れない。

②新田義貞像（狩野探幽画・小川破笠模写）　一幅

江戸時代

絹本著色　一二〇・二×五五・六糎

福井市　藤島神社蔵

本像は、明治二十年（一八八四）七月、松平侯爵家が新田義貞を主祭神とする藤島神社に奉納したものである。新田義貞（一三〇一～三八）は、上野国（現群馬県）新田郡出身の武将で、護良親王の令旨を受け、元弘三年（一三三三）に挙兵し鎌倉幕府滅亡をもたらした。建武政権では、武者所頭入となり、上野・越後・播磨三国を知行したが、足利氏と対立、南朝方の中心的武将として活躍したが、箱根竹の下・兵庫の戦いで敗北し、建武三年〔延元元年（一三三六）〕皇太子恒良親王・尊良親王を奉じて越前に下向し、南朝方勢力の回復を計った。しかし、金崎城の落城にあたって杣山城にうつり、その後、足利（斯波）高経の足羽城攻撃を開始したが、平泉寺衆徒が足利軍に加勢したために衆徒のこもる藤島城攻撃を計画、藤島城へ向う途中、燈明寺畷（現福井市新田塚町）で、敵兵と遭い、矢を受けて深田に伏し、ついに自害した。

本像は、落款に、『宮内卿法印探幽斎筆（瓢印「生明」）』とあり、並列して、『卯観子笠翁謹写「観」』とみえる。即ち、本像は、江戸時代初期に活躍した画家、狩野探幽（一六〇二～七四）の作品を、江戸中期の俳人で、絵師としても知られる小川破笠が模写したものである。模写とはいえ、原本が確認されていない今日、原本的価値を有する。

また破立の作品は、極めて現存するものが少なく、今後注目にあたいする一作品である。

③重要文化財　朝倉孝景（英林）像　一幅

④重要文化財　朝倉義景像　一幅

絹本著色　八一・五×四四・〇糎（孝景）

六九・五×三八・二糎（義景）

福井市　心月寺寄託

二画像ともに、有髪僧形（法体像）であり、筆者及制作年代は明らかではないが、孝景像の方が古い。

絵絹は、縦吹寄せ、横は等間隔の平織素絹で、打込みは孝景の方が緻密である。孝景像の描線は、細く鋭い肥痩のない線で、大和絵的手法を駆使し、義景像のそれは、白描の際用いるのと同様な手法で、割合自由な表現がとられている。

義景像の画賛は、心月寺第九世観渓純察（朝倉氏治下における心月寺の最後の住職）の筆になり、義景歿後、余り年月を経ない時期のものと思われる。

両画像とも、はじめ富山の光厳寺に伝来し、のち朝倉氏一族の中嶋氏が、心月寺に寄進したものであり、昭和四十五年五月、重要文化財に指定された。

○朝倉孝景（英林）

身前朝倉氏第六代家景の嫡男として、正長元年（一四二八）に生まれる。

越前守護斯波氏の家臣として次第に台頭し、越前国内の庄園を次々に押領、勢力をもつ。応仁の乱が起きるや、はじめ西軍に属して奪戦、文明三年（一四七一）に至り、越前国守護職任命を条件に東軍に転じた。

これを契機に、越前国内の対抗勢力である甲斐・二宮・千福等の諸氏と戦い、或いは滅ぼし或いは家臣化して、着々と越前の一円領国化を進めた。文明十三年（一四八一）五十四歳の時、甲斐氏との対陣中に病歿したが、ほぼ越前全域を手中に収め、一大戦国大名朝倉氏の基礎を確立した。

また、彼が制定したと伝えられる十七ヶ条からなる我国最古の分国法は、戦国大名の領国統治の基本的な姿を示すものとして著名である。

○朝倉義景

越前朝倉氏第十代孝景（宗淳）の嫡男として、天文二年（一五三三）に生まれる。初め延景、のち足利十三代将軍義輝の一字を賜わって義景と改めた。

一族の勇将朝倉宗滴（教景）の後見を得て、越前における勢力を維持拡大し、朝倉氏の最盛期を出現させた。一方朝倉氏歴代中、最も風雅の道に関心が深く、本拠一乗谷に京風の武家文化を開花させ、関白二條晴良・連歌師宗養など、多数の公家、文化人が来遊した。

父祖以来、百余年にわたって千代を交えてきた加賀一向一揆との戦に決着をつけるべく、宗滴に命じて討たしめたが果さず、永禄十年（一五六七）足利義昭の調停を得て、一女を本願寺教如に妻わすことを条件に和睦する。

その後、浅井長政・本願寺顕如・武田信玄等の諸勢力と結んで、織田信長に対抗、元亀元年（一五七〇）浅井氏と連繋して、織田・徳川の連合軍と姉川に戦かったが敗れる。一旦和議の後、天正元年（一五七二）再び信長の来攻にあい、北近江の合戦に大敗、一乗谷を捨てて大野の六坊賢松寺に逃れ再起を期したが、一族朝倉景鏡の謀判にあって、四十一歳で自害した。

（義景像賛文）左より

（冠冒印）

松雲院殿前左金吾大球宗光大居士之肖像

有髪俗号衣色僧

本来面目俗非僧

此間天下有雅會

隻履帰西缺歯僧

干旦天正元龍集癸仲秋念有日

心月住侶観奚察拙書　（印）

⑤朝倉義景像（伝曽我宗丈筆）　一幅

室町時代

紙本著色　七〇・三×三七・六糎　兵庫県　個人蔵

御簾の奥の上畳に座し、束帯姿で描かれた本画像は、同時代の戦国大名や、武将像によくみられる以絵の形式をとっている。福井市心月寺には、同じ像主の法体像（重要文化財）がある。すなわち、義景には、以絵と法体像の両方の画像が伝存していることになり頗る興味深い。作者は、越前曽我派の出身である曽我宗丈の作とされるが、松村忠祀氏は「作風から宗丈筆とするには無理がある。しかし、おそらく宗丈より降った曽我派の画系に関係する画人の作として、今後検討に値する一作と思われる」と評している。右下に方形の「富房」なる朱印がみられる。

本画像は、構図上前田利家画像（妙珠寺本）や、豊臣秀吉像（西教寺本）などとほぼ近い桃山時代の作ではなかろうか。本画像は、もとは、福井県敦賀市にあったが、流失した。

⑥武田信玄軍陣影　一幅

江戸時代

紙本著色　九六・五×四〇・二糎

東京都町田市　山県昭彦氏寄託

『甲陽軍鑑』に見える武田信玄の重臣、二十四将の一人で長篠合戦で戦死した山県昌景の孫昌時が、子孫に伝えた肖像画の一つとするものである。

昌時（正時）は、福井藩祖結城秀康に、慶長四年（一五九九）下総国結城において召し抱えられた。秀康の越前入封に従って知行三千石を拝領、のち一万石を領したことがあった。昌時は姓名を笹治正時と改め、子孫代々上級武士の高知席に列した。

本図は、信玄軍陣影の構図がまだ定着をみない江戸時代初期のものとみられ、他に伝来する軍陣影より躍動的に描かれた秀作である。また猛々しく威風堂々としたその姿は、像主の人物像を実によく伝えているといえよう。

⑦武田三将図

江戸時代

絹本著色　八六・〇×三五・四糎

東京都町田市　山県昭彦氏寄託

武田菱紋の前立てを置いた白頭の兜を冠り、鎧具足の上に朱衣と袈裟を覆い、右手に軍配、左手に数珠を持って床机に腰かけた武田信玄軍陣影は、単独像や二十四将図に見られる代表的な構図として知られている。しかし本図のように三将図として描かれたものは珍らしく、信玄単独像から、二十四将に定着するまでの中間的な作品と見られ、江戸初期から二十四将図が制作される元禄年間（一六八八～一七〇三）頃までに描かれたものと見られる。信玄以外の二将について、山県家の伝えるところでは、右を山県昌景に、左を山本勘助に比定している。しかし、二将ともその鎧具足に武田菱紋を用いていることや、武田二十四将図の顔ぶれなどを考えあわせると、特定はできないものの右は武田勝頼、左は武田信廉（のぶかど）（逍遙軒）であろうと思われる。

⑧柴田勝家像　一面

桃山時代

紙本著色　（額装）五八・七×二六・八糎

千葉市　柴田勝次郎氏寄託

柴田勝家（？～一五八三）の肖像画のうち、現存最古のもので、肖像性が高い。本像は、北庄城籠城の際、勝家が近侍の僧侶に命じて描かせた寿像で、遺児勝春（善右衛門）に託されたものという。勝春は、筑前国糟屋郡青柳村に逃れ、のちの柳川藩主、立花氏に召出され、立花家の家臣、小野鎮幸に従い、文禄の役で戦った。帰国後、立花宗茂と鍋島直茂との合戦（筑後江上合戦）で戦死したという。「小野和泉守合戦注文写」（『福岡県史』所収、小

野家文書）に、戦死者二十五人の中にその名が見える。　本像は、柳川柴田家の子孫が所蔵するもので、円座に坐し、右手に扇子と左手に太刀を握っている。裸足で髪は乱れ、腹部は剝落しているが、顔面の剝落はなく、眼光厳しい表情は鬼気せまるものを感じる。腕は太く筋肉質で毛深い。また手足の指の描き方なども力強くリアルでしかも丁寧な筆致である。長らく〝門外不出〟の像として知られていた。

⑨柴田勝家像（石井大順筆）　一幅

昭和時代

絹本著色　一一五・〇×四八・九糎　福島県鹿島町　柴田勝房氏蔵

柴田勝家の祖父勝直の弟、弓馬達人として知られた元成の子孫を称する旧相馬中村藩士、柴田氏の所蔵である。

しかし本像は、昭和十年（一九三五）八月に刊行された『国史画帖、大和桜』（国史名画刊行会編、省文社刊）所収の勝家像を模写したものである。『国史画帖』は錦絵集。

模写したのは、相馬一族の菩提寺の一宇、福島県鹿島町の陽山寺住職、石井大順（孝明）師である。師は、小室翠雲、（大正、昭和初期を代表する南画家、門下に福井南画世界の重鎮、馬来田愛岳がいる）の門下、宮原柳僊の高弟で、平成四年に没している。

箱裏書に「昭和五十一年六月十一日、入竺沙門　大順孝明画」とある。

⑩柴田勝家像（石井渓邨筆）　一幅

現　在

絹本著色　一一八・二×三九・五糎　福島県鹿島町　柴田勝房氏寄託

柴田勝家の肖像画のうち、最も新しい作品である。昭和十年に刊行された『国史画帖、大和桜』に収戴されている勝家肖像錦絵を参考に、若き日の勝家像を創作したもので、史料的価値よりも、美術的価値を有するものである。

作者は、福島県相馬郡鹿島町に在住する石井渓邨（力夫）画伯である。有紋の冠を戴いて把笏（はしゃく）し、狩衣（かりぎぬ）を着た姿は、明治天皇御影をも、年々ハンサムに描かれる北陸の天神画像をも思わせる。

本画は平成二年十一月十四日に完成した。

⑪柴田勝家像（宗法寺住職家本）　一幅

大正時代

絹本著色　一一三・七×四八・七　福井市　柴田性紀氏蔵

像上に「摧鬼院殿台嶽還道大居士　贈　従三位柴田勝家公」とある。大正年間に、勝家の菩提寺（福井市左内町）の木像より写したもので、木像が、昭和二十年七月十九日の福井空襲で失われているから、本像は、信仰史上貴重な価値を有する。宗法寺（福井市城東二丁目＝真宗本願寺派）の累代住職家紫田氏の所蔵で、同家は、柴田勝家の一族で宗法寺の前身、勝縁寺の開基勝密（密家）の子孫を名乗り、勝家の女（むすめ）（母妾佐野四郎女）波枝（なみえ）が勝縁寺五世秀園（勝園）の裏方になったことが同家の系図などにみられる。

⑫重要文化財　浅井長政夫人織田氏（お市の方）像　一幅

桃山時代

紙本著色　九六・〇×四〇・九糎　和歌山県高野町　持明院蔵

近江国北半分を所領としていた浅井長政の室お市（一五四七～八三）で、長政滅亡後しばらくして、織田信長の重臣、越前北庄

城主の柴田勝家と再婚した。長政には十七歳で嫁し、二男三女をもうけている。織田信長の妹で、絶世の美女であったと伝えられる。

女三人のうち、長女は、豊臣秀吉室淀君、次女は、京極高次室常高院、三女は徳川秀忠室崇徳院である。豊臣秀吉の北庄城攻囲により、勝家と共に自尽した。お市の薄幸の生涯を本像は経巻を持たせ能面のような凝結した表情であらわしている。他の同時代の夫人像（細川幽斎夫人・大政所・北政所像）に比べて、いかにもか弱い表情で描かれている。天保十七年（一五八九）に南禅寺の僧、錬甫宗純が讃をした浅井長政像と対幅として伝わったものである。像主の表情には緊張感があるが現存する夫人像としては彩色豊かな華麗で品格の高い作品といえよう。

⑬高野瀬秀隆像　一幅

桃山時代

絹本著色　一一四・二×四四・五糎　滋賀県彦根市　崇徳寺蔵

高野瀬氏は、近江源氏佐々貴氏の支流と伝えられ、応仁の乱（一四六七～七七）では、宗家が、西軍（山名宗全）方の六角高頼に、分家が、東軍（細川勝元）方の京極持清に従った。宗家は、六角氏の配下にあったが、秀隆が、六角氏の対立する浅井賢政（長政）と通じたので、六角義賢（承禎）によって居城である肥田城の水攻めにあい苦戦を強いられたが、よくこれを守備した。

浅井氏の傘下にあった秀隆は、浅井氏が、織田信長に滅ぼされると、信長の家臣、柴田勝家に仕え、越前一向一揆の討伐に加わった。

天正二年（一五七四）四月十二日に、越前安居（現、福井市）で、子の隆景とともに自害した。本像は、高野瀬家の菩提寺である崇徳寺（滋賀県彦根市肥田町）に、高野瀬隆重像、蜂谷頼隆像・長谷川秀一像と共に伝存している。

⑭長谷川秀一像　一幅

桃山時代

絹本著色　八九・五×三九・五糎　滋賀県彦根市　崇徳寺蔵

天正十二年（一五八四）越前東郷城主（現福井市）となった長谷川秀一（？～一五九四）の肖像画である。秀一は、幼名を竹、藤五郎と称し、織田信長に仕えた。本能寺の変の後、豊臣秀吉の配下となり、小牧、長久手の戦、紀州、四国改めで功があった。天正十三年には、敦賀郡で十一万石を与えられている。従五位下侍従に任ぜられ、東郷侍従と俗称された。

文禄元年（一五九二）朝鮮の役で戦ったが、翌二年に彼地で没し、断絶した。

肖像画は、天正十七年（一五八九）に、近江肥田城主になっていることから、元城主、高野瀬家の菩提寺、崇徳寺に、歴代城主像四幅の一つとして伝来した。

⑮石川県輪島市指定文化財

前田利家像（蓮江寺本複製）　一幅

桃山時代

絹本著色　七三・〇×三七・〇糎　石川県立歴史博物館蔵

前田利家（一五三八～九九）は、織田信長の家臣で、永禄十二年（一五六九）兄の利久に代って前田家の本宗となった。桶狭間の合戦をはじめ姉川・長篠の合戦でも戦功をあげ、天正三年（一五七五）越前府中（現、武生）城主となった。

のち、七尾城主となり、賤ヶ岳の戦では柴田勝家の与力を棄て、

豊臣秀吉に寝返った。

やがて、秀吉のもとで金沢を領し、参議となる。五大老の一人として、秀吉歿後も、その子、秀頼を補佐して徳川家康と豊臣間の対立を回避した。

前田氏は、利家の子、利長（一五六二～一六一四）の代に、家康より加賀二郡と能登を与えられ、加賀・越中・能登三国を領した。

本像の原本は、石川県輪島市の蓮江寺に伝存するもので、上部に慶長四年（一五九九）夷則（旧七月）の先甫宗賢（大徳寺一二四世）筆による賛文をもつ。後背には、水墨による山水を描いている。没後間もなく描かれた遺像である。年記名を有する貴重な画像である。

⑯石川県指定文化財

前田利家像（開禅寺本）　一幅

桃山時代

紙本著色　四八・〇×三六・五糎　金沢市　開禅寺蔵

数ある利家画像の中でも最もよく風ぼうを伝えているとされるものである。歿後間もなく描かれた遺像であろう。束帯姿で御簾内（内陣）の上畳に座し、神像を思わせる似絵の形式で描かれている。利家の女千世（むすめ）が藩士村井長次に嫁いだのち、前田家に願って下賜されたものという。

⑰堀秀政像　一幅

桃山時代

紙本著色　五七・二×三〇・七糎　福井市　長慶寺蔵

堀秀政は、初め美濃の斎藤氏、のち織田信長に仕えた武将で、天文二十二年（一五五三）に生まれ、久太郎と称した。

天正六年（一五七八）頃、近江（滋賀）長浜城主となり、二万五千石を領し、同九年には、若狭小浜城に移る。翌十年、羽柴秀吉の毛利氏攻略を援助するため、信長から先発を命ぜられ、備中（岡山県）に出陣したが、まもなく本能寺の変による信長の死去を聞き、そのまま秀吉に属して明智光秀討滅に活躍した。

同十一年（一五八三）、秀吉と柴田勝家が戦火を交えた賤ヶ岳の合戦では、東野山を守って軍功をあげ、進んで越前に入り北庄城（福井）を攻略して、近江佐和山城九万石を与えられた。その後も、長久手の戦、紀伊根来の一揆討伐等、各地に転戦して武名をとどろかせ、同十三年八月越前北庄二十九万石の城主となり、秀吉より羽柴の姓を許され、羽柴北庄侍従と称した。

同十八年（一五九〇）三月、三十八歳の時、小田原征討に先鋒として出陣、五月陣中で病歿した。

本像は、堀氏が菩提寺とした長慶寺（真宗本願寺派＝福井市西木田二丁目）の所蔵である。秀政は、以前の領主とは違い一向宗徒と和合した。

⑱結城秀康像　一幅

江戸時代

絹本著色　九三・六×五六　福井市　運正寺蔵

結城秀康は、徳川家康の二男として、天正二年（一五七四）に生まれる。同十一年、小牧長久手の戦の後、豊臣秀吉の養子となり、更に同十八年下野国結城晴朝の養子となって、結城十万石を相続し結城宰相と称した。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦に、秀康は下野国小山（栃木県）に布陣して上杉景勝に備え、その功によって、一躍越前六十八万石の大大名に任ぜられ、翌年北

庄（福井市）に入城、柴田勝家以来の北庄城を大幅に改築して規模を拡張すると共に、城下町を修築し、名ある武将を始め一芸一能あるものを広く天下に求め優遇し、類を見ない雄藩を作り上げたが、慶長十二年（一六〇七）、三十四歳で歿した。

秀康に対しては、諸大名も弟の身で二代将軍となった秀忠に対すると同等の礼をとって畏服し、秀忠将軍も特別の厚遇をもってのぞんだので、「御制外の家」と呼ばれるに至った。

本像は、松平家の菩提寺、運正寺（福井市足羽一丁目＝浄土宗）に、伝存したもので、秀康に殉死した忠臣、土屋左馬助正明（一五八一～一六〇七）と、永見右衛門尉長次（一五八四～一六〇七）の両像と三幅になっている。このことから、この三幅は、歿後間もなく描かれた遺像とみることができる。上畳、軾に座し、三つ巴葵ちらしの束帯姿で、把笏している。武生市龍泉寺蔵（福井市孝顕寺旧蔵）の秀康三将図（軍陣影）との関係は今後考究されるべきであろう。

⑲結城秀康像（性海寺本）　一幅

江戸時代

紙本著色　八三・五×二七・五糎

三国町　性海寺蔵

福井藩祖、結城秀康の肖像画。箱表書に、「松平越前守中納言秀康卿自画并七夕歌」同裏書に「御室御所仁和寺宮御院跡越州三国湊金剛寶山性海寺什物」箱底書に「秀康卿自画」と墨書があって、いずれも同筆である。

狩衣に折烏帽子姿横向きの像主の上に「ちきりけんこゝろそつらき七夕のとしに一たひあふハあふかな」の和歌賛がある。新出の肖像面であり、今後注目されるべき一作である。

⑳松平忠直像（複製）　一幅

江戸時代

紙本著色　一〇七・〇×四七・四糎

大分市歴史資料館蔵

福井二代藩主松平忠直の唯一の肖像。忠直は、文禄四年（一五九五）結城秀康の長男として生まれ、十三歳で藩主となった。大坂の陣に出陣し、大坂城一番乗りを果たすなど、軍功第一の手柄をたてた。また、原野であった鳥羽野（鯖江市神明地区）の開拓を進め、仁政を施したことでも知られる。

しかし、その後不祥事が続き、幕府の忌むところとなって、ついに元和九年（一六二三）豊後国（大分県）萩原に配流となり、二十七年後五十六歳をもって同国津守で歿した。

この肖像の原本は、大分市浄土寺蔵。忠直の直筆と伝え、箱書に「西巌院殿御直影　御直筆　貳百遠忌ニ付再表相浄土寺二十四世漸誉俊海　嘉永元申年仲秋日」とある。昭和六十一年六月、再表装されている。

㉑松平光通像　一幅

㉒長光院像　（佐々木長淳模写）　一幅

江戸時代

紙本著色　松平光通像　四六・八×三二・七糎

長光院像　四四・六×三一・五糎

東京都　松平宗紀氏寄託

福井四代藩主、松平光通（一六三六～七六）とその乳母、長光院の肖像画である。光通は大安禅寺を建立し、また新田塚の建碑をし、士風の高揚につとめた。長光院は、福井藩士美濃部茂成の母であった（『諸氏先祖之記』）。本像は、幕末に、近江国円光寺の草堂に安置されていた両人の木像より、写したもので、藩士、

佐々木長淳の筆によるという（『真雪草子』『家譜』）。

㉓笹治（山県）正時像　一紙

㉔笹治（山県）正香像　二紙

江戸時代

紙本墨画　（正時）　？　×二五・〇糎

絹本著色　（正香）　三二・九×二四・八糎

四八・三×二八・四糎

東京都　山県昭彦氏寄託

山県家は、武田信玄の重臣で、二十四将の一人として著名な山県三郎兵衛昌景を祖とする。昌景は、信玄・勝頼二代に仕えたが、長篠合戦で戦死した。主家武田氏が滅亡すると、昌景の孫にあたる昌時が、慶長四年（一五九九）下総国結城において、のちの福井藩祖結城秀康に召し抱えられた。秀康の越前移封に従って同六年知行三〇〇〇石を拝領、のち一万石にもなった。秀康に出仕すると昌時は、かって祖父昌景が武田氏の家臣として徳川家康と交戦したことを憚り、姓名を笹治正時と改めたため、幕末に復するまで山県氏は、笹治と称している。

山県家は藩政時代を通じて最高の家格である高知席に列し、家老・城代の要職を歴任した。

福井藩士山県家初代正時は、「山県家系」（山県家文書）等の系図類によると、笹治大膳を称し、「室　山川讃岐守朝貞女　継室織田信貞女」と見え、正香も、福井藩士、山県家六代で、二千六百石を領し、藩家老で城代の要職にあったことが知られる。

正時像は、もと画幅であったが、星霜を重ねて破損した。裏書に「笹治大膳亮正時公御像（以下略）」とある。法体姿で上畳に座している。頭部が失われているが、顔面以下の部分が残存しているので、表情がわかる。

正香像も、画幅であったと思われる。藩主松平家の「三巴葵」の紋の羽織を着用しているので、これは同品を拝領した記念の寿像であろう。正香像は、同構図のものが二紙伝存している。これは、原本が古くなったのでこれを新たに模写したのであろう。原本の像には「笹治一学正香公御像（以下略）」の裏書がある。

㉕松平吉品像　一幅

江戸時代

絹本著色　七〇・二×四二・二糎

福井市　瑞源寺蔵

松平吉品（一六四〇～一七一一）は、福井藩主で、第五代と第七代をつとめた。

三代藩主、松平忠昌の子として福井に生まれる。父の歿後、吉江（現、鯖江市吉江）に、二万五千石の分封を受けて居館を構えたが、兄の四代藩主、光通の遺言により、五代藩主となり昌親と称した。まもなく、兄、昌勝の子、綱昌を養子とし、在職二年にして隠居。六代綱昌が病のために政務を退くと、再び七代、吉品と名乗り、「貞享の大法」後の藩政立て直しに努力した。

本像は、吉品と、母、高照院の菩提寺として崇敬された瑞源寺（福井市足羽四丁目＝臨済宗妙心寺派）の御宮殿（廟）に安置されたもので、吉品生前の寿像という。高麗縁雲形模様の上畳に座し、葵紋を意匠化した束帯姿で、眼光厳しい表情で描かれている。

讃文は、華蔵寺（足羽一丁目＝臨済宗妙心寺派）三世の鎮州付牧の高弟で、瑞源寺二世の鐵叟道剛が寄せている。また、箱表書には「當山開基尊影壹軸　瑞源禅寺」とあり、同裏書に「維時天保十四癸卯年　従御勘定所出来」とみえる。また本像は、明治時代に補修したことが、軸裏書（付箋）に「明治六年吉祥日　御破損ニ付奉修補候也　現住庭宗謹誌」と記されていることより窺え

る。

（讃文）左より、
這箇厳影威冷似霜
前越城主羽林次将
探源寺殿徹公之相
生前護法没後餘光
句丶信筆永丶備忘
享保戊戌暮春既望
智勝創建鐵叟道剛

㉖金屋吉広像　一幅
㉗金屋吉治像　一幅
㉘金屋吉矩像　一幅

江戸時代
絹本著色　四五・七×二二・五糎（吉広）
七二・〇×二九・六糎（吉治）
五〇・五×二六・五糎（吉矩）
愛知県江南市　金屋慶治氏寄託

金屋家は、はじめ北庄氏を称し、室町時代初頭より福井にあって朝倉氏に仕えていたという。

七代吉正（弥助）の時、金屋を名乗り「鉄剣萬物諸商」業をはじめ、福井藩祖結城秀康の北庄築城に協力、御用商人に取りたてられた。以後、代々福井藩の御用をつとめ、苗字帯刀を許され、福井城下のほか三国、鯖江などにも多く出店を持ち、のちには京都にも支店を営業するなど、豪商として全国に聞えた。

四代藩主光通の時、当主七兵衛吉広は福井藩寛文札の札元并元締となり、足羽山の一画に別荘地を与えられている。

藩に多くの御用金を納め、上方の名商角倉と婚姻を結び、紀州家など、他国の大名へも貸付けを行うなど江戸中期頃全盛をきわめた。

本像は、江戸時代前期～中期、各地に次々と支店を開業するなど、金屋家の全盛期を支えた当主三代の肖像画である。

一〇代吉広（瑞月、寛永二十年一六四三－元禄　二年一六八九）
一一代吉治（徹山、寛文　七年一六六七－元禄十六年一七〇三）
一二代吉矩（瑞渓、元禄　元年一六八八－宝暦　元年一七五一）

㉙竹酔園乎哉（こさい）像　一幅

江戸時代
紙本著色　九六・一×三一・七糎
横須賀市　山口晴巳氏　寄贈

竹酔園乎哉（こさい）は、江戸中期以降、福井城下を代表する商家であった山口家の出身でその名は俳号である。著書に『年の魂祭』（文化六年＝一八〇九）がある。作品は、『星の宵塚』『歳のすさび』『東山十百韻』『あちま野』『道之春集』『ゆめの葉桜』『雪の俤』等の俳書に収載されている。本像は、宗匠帽を冠し、右手に小筆を持った、いかにも当代の俳人らしい風貌で描かれている。箱表書に「竹酔園乎哉像　自祝短冊張」とあるように像上に乎哉自筆自詠の俳句短冊が貼り付けられている。短冊に「自祝　薙捨（かりすて）て世にかさる草の花もなし　菰齋」とあるように「乎哉」はまた「菰齋」とも作ったようである。

㉚小野玄信像（伊星叟岳画）　一幅

江戸時代
紙本著色　九八・一×二九・一糎
福井市春嶽公記念文庫蔵

小野玄信は、丸岡藩医で名は良材、字は子能、白水を号とした。十六才のとき、江戸に遊学し、新井静斎に師事して医学を修め、

関文太郎について漢字・漢詩を学んだ。丸岡きっての秀才といわれ、二十四才の若さで丸岡藩枝、平章館の儒官となり、二十七才で侍医となった。文政十一年（一八二八）四月八日四十二才で歿した。

本像は、丸岡藩の絵師、伊星叟岳の描いたものである。伊星叟岳は、藩士、大崎太郎右衛門の二男で、のち、同藩の伊星家を継いだ。絽か紗の羽織をまとい隠やかな表情で描かれている。本像には、長文の玄信小伝が記されてあり、玄信の遺像であることが知られる。小伝には、「天保二年（一八三一）歳次辛卯夏四月芳正大謹書」とある。

㉛松平春嶽像（波々伯部捨四郎画）　一幅

明治時代

絹本著色　一一二・一×四〇・二糎

東京都　松平宗紀氏寄託

十六代福井藩主、松平春嶽（一八二八～九〇）の肖像画である。波々伯部捨四郎の描いたもので、捨四郎の落款及び印がある。越前松平家の『家譜』松平康荘公、明治二十五年六月十九日条に「春岳公茂昭公画像描画の儀に付、波々伯部捨次郎来邸セリ」と見えているから、福井十七代藩主、松平茂昭（一八三六～九〇）像とともに描かれたものである。

㉜松平茂昭像（波々伯部捨四郎画）　一幅

明治時代

絹本著色　一一二・〇×四〇・三糎

東京都　松平宗紀氏寄託

松平茂昭は、天保七年（一八三六）越後糸魚川藩主松平直春の子として生まれ、安政四年（一八五七）糸魚川藩一万石の藩主となる。はじめ直廉と名のり巽嶽と号した。安政五年（一八五八）七月、井伊直弼との政争に敗れて隠居急度慎を命ぜられた松平春嶽のあとをついで、福井十七代藩主となる。幕末、激動多難な中に、よく藩を始め、政局を中心にあった養父春嶽をたすけた。しばしば国政に参加して建議し、長州への出兵にあたっては副将として出陣、また会津征討にも藩兵を指揮した。

維新後、進んで版籍奉還を行ない藩知事となり、侯爵を受けられ、明治二十三年（一八九〇）七月、五十五歳で歿した。

越前松平家の『家譜』（康荘公、明治二十五年六月十九日条）に、「春嶽公茂昭画像描画の儀に付、波々伯部捨次郎来邸セリ」とあり、十六代藩主、松平春嶽像と対を成すものである。なお、松平家（旧侯爵家）には、草川重遠画による同じ構図の松平茂昭像も伝存している。

㉝松平春嶽像（佐々木長淳画）　一面

明治時代

油彩・キャンバス　七〇・〇×五〇・〇糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井十六代藩主、松平春嶽（一八二八～九〇）の肖像油絵である。本像は、明治十七年ころに撮影された春嶽肖像写真を元にして描かれたもので、福井藩士、佐々木長淳（一八三〇～一九一六）の模写によるものとされる。

本像は、像主の晩年に描かれており、春嶽真筆の書翰（明治十七年十月五日付）が、佐々木家に伝存している。

その書翰によると、本像完成後、佐々木長淳とその子、三六が、春嶽邸にわざわざ持参したことがわかる。春嶽は本像と「好画ニテ満悦之至」と評しながらも「不肖鈍ノ慶永（春嶽）真影ヲ子孫ニ伝フルヤ赧汗ニ候ヘトモ好手ノ名誉ヲ後世ニ示ス（以下略）」と子孫に書き遺している。書翰宛名には長淳の男三六の名もみえ

るから、あるいは本像は、明治の洋画壇で活躍した佐々木三六の模写による司能性もあるといえよう。

（書翰）

拙者写真ヨリ模シタル油絵兼テ及御依頼置候処、落成ニテ昨日態々来邸被差出一覧候、実ニ可驚好画ニテ満悦之至、不肖努鈍ノ慶永直影ヲ子孫ニ伝フルヤ赧汗ニ候ヘトモ、好手ノ名誉ヲ後世ニ示ス、於余本懐ノ至リニ候、不取敢父子厚意ノキヲ真謝スルヲ表スルタメニ参趨ス、明治十七年十月五日東照宮八代目孫　秀康卿十四代裔　正二位勲二等　松平慶永（印）　佐々木長淳殿　佐々木三六殿

㉞松平春嶽夫人細川氏（松平勇子）像　一面

明治時代

油彩・キャンバス　四二・五×三三・二糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

第十六代福井藩主、松平春嶽の正室、勇子（勇姫）の肖像画である。勇子（一八三四～八七）は、熊本藩主、細川斉護の三女として生れる。七歳のとき十三歳の春嶽と婚約、嘉永二年（一八四九）正室となる。勇子は、春嶽の藩財政立て直しに協力し、大奥内の節倹に手本を示したり、有能な藩士登用のために、実家熊本藩から横井小楠を招くことにも尽力した。

本像はキャンバスの上に金泊を施しその上に、油彩で描き上げられたものとみられる。キャンバスの裏面には、「東京伊藤彩料舗」の焼印がみえる。また、裏面に「明治二十年四月　佐野常成謹写」とあって、その制作年代も作者も明らかである。作者、佐野常成（明治後期には、浜田常成と名のる＝一八六八～?）は、現、福井市勝見に生まれ、東京本郷独逸学校、東京築地大学校に学び、油画師、川村清雄に就いて五年間鉛筆画を、また、チョーク画水彩画油画を修業し、この間、イギリス人、ウォルスらに就いて研究した。明治十九年より江湖の需要に応えて、おもに、油画の肖像を描いている。明治二十年八月より二十四年十二月まで、第四高等中学の図画教員となり常成は、当時佐野確次郎あるいは、高橋確次郎と名乗っている。第四高等中学を退職後は、第二高等中学校、三重県内の中学校に大正初年頃まで勤務した。本像は、像主の生前（明治十八年・十九年頃）の写真を元に描かれたものとみられる。

㉟閒部詮勝像　一幅

明治時代

絹本著色　九九・二×五八・六糎

鯖江市　土屋雅之氏蔵

閒部詮勝（一八〇二～一八八四）は、第七代、越前鯖江藩主で文化元年兄、詮允の養子となり、文化一一年襲封した（慶応元年以降松堂と号した）。寺社奉行加役、大坂城代、京都所司代を歴任し、天保一一年（一八四一）老中に就任したが、水野忠邦とあわず同一四年に辞任した。

辞任後は、領内に嚮陽渓なる遊園地をつくるなど、藩政に尽力したが、再び幕閣となり、大老、井伊直弼のもとで、老中として活躍、紀州派の主要人物となって福井藩主の松平春嶽ら一橋派と対立した。

しかし、「安性の大獄」における志士らの処分問題で井伊と意見があわず、老中職を退いた。文久二年（一八六二）、老中在任中の責任を問わせて、隠居、謹慎を命じられ、更に一万石を減封された。晩年は、自適生活を送っている。

本像は、短冊を持ち思いをためる姿で描かれている。この表情や構図は、詮勝晩年の写真（『鯖江郷土誌』所収）に類似するが、

作者は単なる模写をしたのではなく創作的意欲も感じさせる作品である。像上には詮勝の小伝がある。これは、鯖江藩士、松井政治（正吉）が撰文し、詮勝の孫で閒部家十一代を継いだ詮信（あきのぶ）（一八七九～一九六一）が浄書している。松井政治は、維新後、小学校教育に従事し、その傍、郷土研究をし、『新撰鯖江誌』一巻を著した。大正十四年五月に歿した。

本像を所蔵する土屋家は、代々鯖江藩の御典医を勤めた。

㊱松平主馬像　一面

明治時代

油彩・ボード（厚二ミリ）

滋賀県大津市　松平千秋氏蔵

松平主馬（しゅめ）家は、福井藩に仕えた長沢松平氏で、初代正世の父親清は、三河御馬村（現愛知県豊橋市）五百貫を領した。

正世は、兄、清直と共に徳川家康の六男、松平忠輝に仕えたが、忠輝配流後、元和三年（一六一七）松平忠昌に信州松代で召し出されて千五百石を領した。のち、越後高田の転封に従い三千石に加増されている。忠昌が福井三代藩主になると、六千石の家老職となった。幕末まで、高知席として藩士族の指導的立場にあった。

本画は、藩政期最後の当主、主馬の肖像画で、油彩ボード地に描かれている。なお、作者、制作年代は不詳である。なお、松平主馬旧宅を三秀園と称し、明治時代には、迎賓館的役割を担っていた。

㊲中根雪江（せっこう）像（亀井竹二良画）　一面

明治時代

油彩・キャンパス　五三・九×三四・八糎

東京都　中根　隆氏　寄贈

中根雪江は、福井藩士中根衆諸の長男として生まれ、名を師質（もろかた）、通称靱負（ゆきえ）、雪江（せっこう）と号した。文武の修業を積む内、国学に志をいだき、天保九年（一八三八）江戸詰となった機会に平田篤胤の雄入となり、その高弟として知られる。

弘化年間（一八四四～四七）松平春嶽に抜擢されて側用人となり、常に近侍して藩政改革を強力に推進した。嘉永六年（一八五三）ペリー来航を契機に、春嶽を助けて幕末の政局に参画し、福井藩を代表する重臣ともくされるに至った。橋本左内の才能を見抜いて、その抜擢に努力し、左内最大の理解者として、互いに協力しあいながら、対米外交問題解決のため必死の活動を展開した。就任後は、これを助けて幕政改革に努力し、諸藩の有志と交流しつつ、主として京都で朝幕間の周旋に努力した。王政復古後、新政府の参与となったが、間もなく辞任、福井に閑居した。

幕末における松平春嶽の事蹟を中心とする福井藩の活動を、公正な筆致で記録し、「昨夢紀事」「再夢紀事」「丁卯日記」「戊辰日記」などを著わした。いづれも幕末維新史の重要史料となっている。明治十年（一八七七）十月三日、七十一歳で歿した。

本像は、明治十年十月三日、雪江の他界と同時に、嗣子牛介が画工、亀井竹二良に依頼し、作成したものである。画面裏板に墨書で

「明治十年十月ヨリ十一月ニ至リ、当時之画工亀井竹二良氏之写ス所。東京ニ於テ三ヲ争フ人」。

「明治十年ヨリ三十二年今日迄ガタガタト気ニ不入、数年ヲ打過漸ニシテ如期」

明治三十二年九月十日牛快漁夫記ス」

とある。また福井市春嶽公記念文庫には、写真家、内田九一製の雪江小照（＝写真紙焼、明治二年一月二十五日付。横浜で撮影した由の雪江自筆裏書がある。雪江より松平春嶽に呈上されたもの

の。）が保存されており、本画像は、この写真をもとに描かれたものであることが推考できる。

㊳鈴木主税像　一面

明治時代

油彩・キャンバス　四六・〇×三四・〇糎

東京都　松平宗紀氏寄託

鈴木主税は、名を重栄、通称主税、鑿城などと号した。文化十一年（一八二四）福井藩士海福正敬の子として生まれ、同藩鈴木長恒の養子となる。幼年より学問を好み、その英才ぶりは、早くより藩内の評判となった。

天保十三年（一八四二）十六代藩主春嶽の時、寺社奉行となり、のち町奉行に転じて善政をしいた。この間、城下木田の町民が、その仁政を深く感謝し、生前より世直神社を創建して神と仰いだことは有名である。この神祠は今日も旧一里塚のあたり福井市みのり二丁目に現存し崇敬をあつめている。

弘化三年（一八四五）以降、側向頭取、側締役などに任じて年少の藩主春嶽を補佐し、嘉永六年（一八五三）黒船の来航を知るや奮然として、江戸に赴き、藩政の機密に参与し、国事に奔走することとなった。諸藩有為の士と広く交わり、意見を交換して、自藩の進路を誤らせず、学事、財政、兵備等すぐれた建築をして藩政の一新をはかった。俊秀橋本左内を見いだし春嶽に推挙したのも主税である。安政三年（一八五八）江戸常磐橋藩邸内で左内に見とられつつ、四十三歳で歿した。

生前、水戸の藤田東湖は「今や真に豪傑と称すべき者、天下に鈴木主税、西郷吉之助（隆盛）あるのみ」と評し、肥後藩家老長岡監物は、「学術正大にして徳義智識備はるは重栄に如くはなし、余最も重栄に服す」と評している。

本像の画工は判然とはしないが、添書に「贈四位　鈴木重栄肖像　不肖男重弘謹記」とある。

㊴半井仲庵像（山田成章画）　一面

明治時代

油彩・キャンバス　六二・五×四四・〇糎

福井市医師会寄託

半井仲庵は、福井藩医。名を保、通称を元仲・仲庵といい、南陽・暁春と号した。藩医の重鎮として十六代藩主松平春嶽の信任厚く、才能ある若い医師を数多く見出し、これを援助育成して、幕末福井の医学水準を、全国有数のものに高めた功労者である。仲庵自身は漢方医として出発したが、友人の蘭方医笠原白翁の影響で、四十歳を過ぎてから西洋医術に志し、研鑽努力の結果、周囲の青年蘭方医達を驚嘆させる程の原書読解力を身に付け、福井の蘭方医術興隆の基礎を築いた。明治四年（一八七一）十二月、大阪に病気治療のため旅行中、六十歳で歿した。

本像は、福井藩医半井仲庵の歿後三年を経た明治七年（一八七四）十二月、当時台湾蕃地病院長であった橋本綱維（左内の弟）等、福井医学校関係者十三名の発起によって、山田成章（画面にSigeaki Yamadaのサインがある。）が描いたものである。別に松平春嶽の賛文が付されており、福井藩における蘭学興隆の基礎を築いた仲庵を称えている。その賛文は、左のとおりである。

邦醫、昔歳　蘭学に懵し　顧みるに汝光鞭して独り群を出づ
今日の隆興　偶爾に排ず　長く小照に留めて遺勲を表せん。

山田成章は、明治時代に活躍した洋画家で、弘化二年（一八四五）九月に生まれた。実家は大阪の八軒家で米商を営んでいたという。成章は、東京本郷湯島三組町に住み、万延元年（一八六〇）から木村貫山に円山派を、のち西山芳園に四条派を学んだ。明治

五年三月十二日、高橋由一の天総学舎に学び、明治十年の第一回内国勧業博覧会では「仁徳天皇登高図」「佐用姫慕夫図」を出品している。平木政治の自述伝によれば、「当時、山田成章は、医科大学に勤め、図画を描いて居た」とあり、本像との関係を推考することができる。

㊵橘曙覧像（越智通兄筆）　一幅

江戸時代

絹本著色　六一・〇×三六・〇糎

東京都　井手孟雄氏寄託

幕末期に活躍した歌人・国学者、橘曙覧（たちばなのあけみ）（一八一二―六八）の肖像画で、曙覧の友人、越智通兄（河野菱渚）の筆による。家伝によると、「福井十六代藩主、松平春嶽より拝領した白袖の衿を着てコタツに入っているところを描いてもらった」という。

曙覧は、丹生郡本保村（武生市本保）の河野茫洲の屋敷を訪ねた際、居合わせた菱渚が写生したもので、曙覧晩年の寿像として著名である。曙覧は、この肖像画に、「雲ならで通はぬ峯の岩かげに神世にほひ吐く草の花」という賛の和歌を付している。通兄は、南宋画を学び、明治二十三年に京都画学校教授となった人で、明治三十三年に五十八歳で没した。

㊶橘曙覧像（菱川師福（もろよし）筆）　一幅

紙本墨画　一一三・五×二七・二糎

本館蔵（旧市立福井図書館蔵）

幕末期に活躍した国学者・歌人、橘曙覧（一八一二～六八）の肖像画である。この肖像画を描いた菱川師福（もろよし）（一八四五～一九四一）は、福井の郷土画家で、松村景文・岡本豊彦門下の早瀬来山に師事し、四条派の系統を受ける。本図には、落款に「昭和七年壬申歳為橘曙覧翁記念　八十八翁菱川師福図之（印）」とあり、昭和七年十一月、旧市立福井図書館で開催された「曙覧遺墨展示会」に参考品として出品したものである。ところで、師福は、幼少の頃、曙覧に手習いを受け、その謦咳に接した。師福は本図を「私の古い記憶」を辿って曙覧の姿を描いたという。昭和八年一月発行の「福井評論」新年号（福井評論社）刊に、師福が、「曙覧翁と私」なる追想録を執筆している。それによると、曙覧はなりふりをかまわず、いつも浅黄木綿か小紋の布子を裾短かに着て、羽織がわりに紙衣をつけ、人からたのまれた歌（短冊・懐紙・書幅など）は、唐更紗の風呂敷に包み、腋の下にはさんで用達しに出かけたという。なお師福は本図の試作に、五・六十枚も描いたという。そのためか、このときの試作と見られるものが、他に若干数現存している。

㊷佐々木長淳（ながあつ）像　一面

明治時代

油彩・キャンバス　六九・八×五六・一糎

東京都　佐々木賢一氏寄託

佐々木長淳は、福井藩士佐々木長恭の長男として天保元年（一八三〇）に生まれる。通称は権六。嘉永六年（一八五三）家督を相続し、藩命によって洋式兵学を修業した。

福井藩製造局の頭取として、洋式銃砲の大量生産に成功し、「一番丸」と命名された洋式船を独力で建造、見事に進水させた。親類にあたる橋本左内とは、幼年期より友人関係にあり、蘭学研究等、互いに協力しあった。慶応三年（一八六七）藩命で米国へ渡り、兵器や紡織機を研究、その購入交渉に当った。明治三年（一八七〇）外人教師グリフィスの来福に当っては、英語力を駆使して万端の世話をしている。廃藩後は東京へ移住し、工部省へ出任して紡績事業の興隆に努力するとともに、郷里福井の産業振

興にも力を注ぎ、繊維王国福井の基礎を築いた。大正五年（一九一六）八十七歳で歿す。

長淳は絵画もよくし、維新後橋本家の依頼で、「橋本左内肖像画」を描いた。

本像は、佐々木家に伝存したもので、長淳自画像か、男、三六（さんろく）の手によるものと推考される。

キャンバスの裏面には「J.I.BUMPODO」の焼印がある。

㊸橋本左内木版像（富岡永洗筆）　一幅

明治時代

紙本著色　六七・三×三七・二糎

宝塚市　林愛子氏寄贈

幕末の福井藩士で俊英の誉れ高い橋本左内（一八三四－五九）の肖像画の一つである。左内は、藩儒、吉田東篁（とうこう）に学び、大阪へ出て、緒方洪庵に医学、洋学を、さらに江戸に遊学して、蘭学・医学を杉田成卿に学んだ。

藩主、松平春嶽に抜てきされて、藩校明道館学監同様心得となった。将軍継嗣問題が起きると、春嶽の懐刀として一橋慶喜擁立に尽くしたため、反対派井伊直弼の知るところとなり、安政の大獄で処刑された。この版画は、『越前人物志』の著者、福田源三郎が、明治四十年ごろ、東京の挿絵師、富岡永洗に依頼して描かせ、領布されたもので、今日、最も全国によく流布している左内肖像画である。明治以降の左内（景岳）の顕彰史を見る上で貴重な史料である。

賛文は、

惜二寸陰者。乃有レ凌二鑠千古一之志上。
憐二微才一者。乃有レ馳二驅豪傑之心上。

景岳㊞

とある。この詩は、『橋本景岳全集』（昭和十八年六月二十日、敏傍書房刊）下巻、一五五二頁に所収されている。同書の解説によると、詩稿原本の所蔵者は不明であるが、この詩は旧福井藩士、村田氏寿（うじひさ）に左内が与えたもので、同文の詩稿を田中光顕（旧土佐藩士、明治後期の宮内大臣）も所蔵していたものと記されている。

㊹橋本左内像（島田墨仙筆・複製）　一幅

昭和時代

紙本墨画　五一・七×三五・一糎

本館蔵

歴史人物画を得意とした島田墨仙が、明治の末年、福井の有志から依頼され、長い年月をかけて描いたものである。景岳の肖像画としては、すべてに明治八年、左内の親戚で絵心のあった佐々木長淳の描いたものがあったが、その完成当初より、あまり似ていないとの評判があった。そのため、左内の門弟であった堤正誼（まさよし）・加藤斌（なかば）（溝口辰五郎）等が、自分達の記憶が鮮明の内に、後世に良い肖像画を残そうと、墨仙に揮毫を依頼したものである。

景岳に接することのなかった墨仙は、提正誼等の助言を得て、今日のモンタージュ写真のように、何度も修正を加えつつ、大正三年に一応の下絵を完成したが、都合により一旦中止を申出、しばらくそのまま放置した。昭和十年に至って、たまたま以前の下絵を発見し、さらに修正を加えて完成したのが、この画像である。のちに、国定教科書にも採用され、福井では誰にもなじみ深いが、原本は戦災で焼失した。

㊺橋本左内像（佐々木長淳（ながあつ）筆　松平春嶽筆左内小伝を附す）　一幅

明治時代

紙本墨画（幅）　一一三・五×五六・〇糎

（肖）　三一・三×二〇・四糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

幕末の福井藩士、佐々木長淳（ながあつ）が描いたもの。同じ幕末の福井藩士で安政の大獄で処刑された橋本左内の肖像画である。

橋本左内（一八三四－五九）の肖像画は数種知られているが、本図が現存最古のものである。また、この肖像画の上部には、福井十六代藩主、松平春嶽直筆の左内小伝（簡単な伝記）が付されている。

この肖像画は、左内没後十六年を経た明治八年（一八七五）に、橋本家からの依頼によって、絵に巧みであった長淳に描かせたものである。長淳は左内と縁戚にあたり、生前知己の仲であったから、左内の人となりをよく知る者の手による作品として高い信憑性を持つものといえよう。

㊻橋本左内像油絵（川端哲雄筆）　一面

昭和時代

油彩　四一・〇×三一・八糎

本館蔵

佐々木長淳筆と島田墨仙筆の左内像を折衷したごとき構図で描かれている。作成意図や伝来について不明であるが、もと福井市役所の助役室にあり、昭和四十六年当館に移管されたものである。

㊼横井小楠銅版像　一紙

明治時代

紙本銅版刷　二一・二×一三・一糎

福井市春嶽公記念文庫蔵

横井小楠（一八〇九－七〇）は、熊本藩士で安政五年（一八五八）、福井藩に賓客として招かれた。開国通商・殖産興業による富国強兵策を主張し、橋本左内没後の藩政改革を指導した。福井藩の政変で失脚し帰国するが、明治新政府では徴士参与として出仕した。翌年、キリスト教教化思想家であるとのことから暗殺された。

この肖像画は、小楠の肩衣姿の写真をもとに、嫡男である伊勢時雄が製版させ、松平春嶽に贈ったものである。肖像周辺に、春嶽の筆で「横井先生（平四郎・時存）肖像　明治廿二年二月廿三日　先生嫡男伊勢時雄ノモノナリ。源慶永識」とある。銅版の製作者は不詳である。

㊽高杉晋作像　一幅

昭和時代

絹本墨画　一一八・〇×四一・〇糎

山口県下関市　東行記念館蔵

高杉晋作（一八三九～六七）は、萩藩士で、雅号を東行（とうぎょう）などと称した。萩藩の明倫館に学び、一九歳のとき松下村塾に入門、久坂玄瑞とともに松門の双璧とその英才ぶりを評された。さらに江戸の昌平黌（こう）に入学し、帰藩してまた明倫館にもどり修学した。文久元年（一八六一）小姓役となったが、翌年、藩命にて上海に渡り、大平天国の乱を目撃したことにより、帰国後、尊王攘夷運動に挺身した。文久三年の下関砲撃事件に際して奇兵隊を結成し、身分にかかわらない有志による軍隊を編成した。のち脱藩したが、再度起用され、四国艦隊下関砲撃事件の正使として講和条約を結んだ。しかし、藩内の保守派勢力台頭により再び脱藩、諸隊の将として、討幕活動を推進していたが、慶応三年（一八六七）四月、馬関で病歿した。

本像は、『東行先生遺文』（大正五年刊）の口絵に使用された、慶応二年撮影の肖像写真をもとに描かれたものである。

晋作は、万延元年（一八六〇）十月に来福し、福井藩に招かれていた熊本藩士、横井小楠を訪ね、小楠の著述『兵法問答』を書

写している（高杉晋作書写『兵法問答』奥書による）晋作は、このとき小楠を長州藩に招聘しようと考えていたが結局は、失敗に終った。

㊾坂本龍馬像（公文菊僊筆・中嶋気峥賛）　一幅

明治時代

絹本著色　一二七・八×五〇・二糎

京都市　霊山歴史館蔵

坂本龍馬（一八三五～六七）は、旧土佐藩郷士で、はじめ北辰一刀流の剣士として知られたが、文久元年（一八六一）、土佐勤王党に参加。翌二年に、萩藩士の久坂玄瑞を訪ねて影響を受け、のちに脱藩している。脱藩後は、江戸に出て、勝海舟を訪ねその新世界観に触れ、攘夷論を棄てた。勝門下生として海舟の信頼を得たが勝が失脚すると、薩摩藩の保護をうけ、長崎に商社（のちの海援隊）を経営した。龍馬は、慶応二年（一八六六）長薩両雄藩の同盟を成立させ、また、土佐藩士、後藤象二郎を説いて藩主、山内容堂（豊信）を動かし、大政奉還を実現させた。後藤と彼が船中でまとめた大政奉還論・公議政治論に関する八ケ条の構想は、「船中八策」として著名である。慶応三年十一月十五日京都の近江屋で暗殺された。歿年三十三才。龍馬は福井に二度訪れている。一度は文久三年（一八六三）五月で、勝海舟の使者として、神戸海軍操練所設立援助金の要求に赴き、藩主、松平春嶽をはじめ、横井小楠・由利公正（三岡八郎）を訪ねている。また、再来福は、慶応三年十一月で、それは、彼が暗殺される実に二週間前であった。このとき、彼は、由利公正と城下の宿舎、烟草屋で逢い、新政府の財源政策について相談している。

さて、本像は、中岡慎太郎・武市瑞山など、特に勤王思想家の肖像を描いた高知市出身の日本画家、公文菊遷（時衛）の筆によるもので、菊遷は、同じ構図の龍馬像を二千枚あまり書き上げたと伝えられている。また賛は中島気峥（一八六三～一九三六）によるもの。気峥も高知県安芸市の人で、漢学者でありまた、国民新聞の記者として徳富蘇峰の傘下にあった。

土佐人の郷土愛が非常なるものであったことを本像を通して窺うことができる。気峥の賛文は、日露開戦に際して、龍馬が、葉山御用邸の昭憲皇太后の夢枕に立ったことを賦したものという。

㊿米倉忠七像　一面

大正時代

絹本著色　三一・〇×二〇・六糎

武生市　米倉まさ子氏蔵

明治二年の版籍奉還後、越前府中（武生）領主、本多副元は、福井藩の家臣であったことから、華族に列することが許されなかった。このため、本多家と旧家臣たちが昇格運動に懸命となり、ついには町方旧領民層にまで拡大した。翌年五月には、旧家臣らが民部省に越訴して謹慎させられ、八月にこのうち六名が民部省から福井へ護送されるが、その途中、彼らを救わんとした民衆が、打ちこわし・放火などを行って大暴動となった。これを武生騒動という。このとき、一六〇人余が逮捕され、旧家臣二名は獄死、町民三名は処刑された。本像は、この騒動で補縛された町民米倉忠七（「武生郷友会誌」第四一号所収の「秋の空こと噂を菊の香」には、水屋忠七郎とみえる。）の肖像画である。彼は、江戸に出向いていたが、飛騨高山より大野郡穴馬に出たところを捕縛され、厳しい拷問にあって、その後足が不自由になったという。忠七は、谷水と号し、藩校「立教館」の建設に私財を投じた松井耕雪（一八一九～八五）の旧隠居所「逍遙園」を所有した。本像には、「揮一写」（花押）と記されている。

協力者・写真提供者（順不同　敬称略）

青園謙三郎
一坂太郎
井筒信隆
宮崎恵仁
小西洋子
長田弘通
柴田勝次郎
松村忠祀
芹川貞夫
後々田寿徳
鳥山悦子
長坂一郎
佐藤　圭
田中勝弘
清水　尚
大月三千世
東野利和
竹内崇峯
岡田芳幸
吉用賢治
内田源樹
篠　雅弘
木村幸比古
大八木洋
マイク・ヨコハマ
清水滋夫
柴田勝房
川崎泰市
菱谷全良
三木世嗣美
竹内信夫
清水勇男
稲垣正次
山田雄造
小林茂樹
尾崎寛道
山県昭彦
柴田性紀
薮本公三
土屋雅之
印牧邦雄
印牧信明
小林　明
松平宗紀
弘中敦子
松平永芳
松平千秋
中根　隆
佐々木賢一
米倉まさ子
井手孟雄
安村敏信
金屋慶治
高瀬俊英
花房禅佑
上島清彦
長谷川孝徳
本康宏史
母利美和
田邊昌平
若杉準治
樟本立美
橋本寿一郎
横塚慶子
玉木勇介
橋詰　力
白崎　卓
西光寺
持明院
高野山霊宝館
鯖江市資料館
鯖江市立図書館
東行記念館
心月寺
藤島神社
滋賀県立安土城考古博物館
福井県立美術館
松平家管理事務所
大分市歴史資料館
安祥院
瑞源寺
運正寺
性海寺
長慶寺
福井県神社庁
蓮江寺
崇徳寺
開禅寺
高野山文化財保存会
霊山歴史館
京都国立博物館
石川県立美術館
石川県立歴史博物館
福井市医師会
浄土寺
福井市立図書館
文化庁
福井県教育庁文化課

解説　主任学芸員　西村英之
編集解説　学芸員　足立尚計

福井の肖像画

発行　平成五年十月
編集　福井市立郷土歴史博物館
〒九一〇　福井市足羽一丁目八番十六号
電話（〇七七六）三五―二八四五
印刷　河和田屋印刷株式会社

福井市立郷土歴史博物館